

平成9年11月28日

日本におけるイマージョン教育の実践： 結果報告、さらなる課題、および可能性

加藤学園

マイク・ポストウィック

加藤学園イマージョンプログラム概要

イマージョンの歴史と背景

イマージョンの定義

イマージョン・プログラムの意図するところは、バイリンガルリズム（二ヶ国語に通じていること）、二ヶ国語で読み書きができることを推進することである。イマージョンの際立った特色は、大半の(50%~100%)通常カリキュラムは外国語を使用して教えられることである。イマージョン・プログラムでは、外国語は学習教科ではなく、その言語を用いて大半の学校教育内容が教えられる媒体なのである。

イマージョンとは、最も徹底した内容中心型外国語教育を意味するといつてよい。

イマージョンのタイプ

早期イマージョンと言われているものは、幼稚園、もしくは小学校1年から開始され、概ね中等教育へと何らかの形態で継続されている。早期完全イマージョンでは、初期の2ないし3年間は授業の100%が外国語で実施され、その後中学校になるまで徐々にその割合を減らしてゆき、40から80%まで減らす。完全イマージョンでは、通常の学校カリキュラム（例、算数、理科、社会、等）は小学校課程では完全に第二言語で教えられ、生徒は読み書きを、第一言語に先んじて第二言語で習う。第一言語による読み書き学習は、従って、通常は早期イマージョン・プログラムの第2ないし3学年になるまで行われない。

今一つの一般的イマージョンの形態は、早期部分的イマージョンと呼ばれているもので、50%の教科が第二言語で実施され、残り50%は第一言語で行うものである。このイマージョン・プログラムもまた通常は幼稚園、ないし小学校1年から開始され、イマージョンの割合は小学校課程を通して変えられない。部分的イマージョン・プログラムでは、まず子供の第一言語による読み書き技能が教えられた後、第二言語による読み書き指導が始められる。どの学科を第一言語で教え、どの学科を第二言語で教えるかはその学校の判断で選択される。

イマージョンのタイプの形態は、以下に示した二つの要素の組み合わせにより分類される：

1) イマージョン・プログラムの開始時期、2) 第二言語が学校内で使用される割合

- | | |
|--------------------|-------------|
| 1) 早期(Early) | 2) 完全イマージョン |
| 中期(Delayed/Middle) | 部分的イマージョン |
| 後期(Late) | |

加藤学園の実施しているタイプ

加藤学園の場合、そのイマージョンタイプは部分的イマージョンの「混合タイプ」と言ってもよいだろう。日本の小学校カリキュラムは学年が上がるごとにますますその難易度を増してゆく。生徒がそれについて行けるようにするために、われわれは低学年で行う英語による授業を最大限に確保したかったのである。また生徒は母語使用においても遜色があってはならないと考えたため、国語の授業数は普通プログラムの生徒と同じだけ確保された。

イマージョンの発展

最初のイマージョン・プログラムが 1965 年カナダで始められて以来、北米でのイマージョン教育は急速に拡大してきている。カナダ・フランス語を話す親の会、およびアメリカ応用言語学センターの統計資料によれば、現在カナダでは 30 万人以上の生徒がフランス語イマージョン・プログラムに在学しており、およそ 3 万 2 千人生徒がアメリカの外国語イマージョンにいる。さまざまなイマージョン教育が今や世界中で進行中なのである。

プログラム参加生徒数

加藤学園イマージョンプログラムは、1992 年小学校生徒 1 年生 29 名をもって発足した。現在プログラム参加生徒数は幼稚園児から小学校 6 年生まで、340 名を超えている。

部分イマージョン：授業の 2分の1 から 3分の2 は英語でおこなわれる

われわれのイマージョンは、部分イマージョンプログラムである。幼稚園の段階では、生徒の幼稚園で過ごす時間のおよそ半分が英語で運用されている。小学校 1 年生から 3 年生までは、日課のおよそ 3分の2 が英語を使って過ごす。4 年生から 6 年生までは、英語使用率は 2分の1 に下げている。

英語を使用する教科

幼稚園段階では、教師が年間行事計画、カリキュラム目標に沿ってテーマ別単元を考案している。小学校 1 年から 3 年生は、国語を除く全教科（但し、3 年生は音楽の一部を除く）を英語で実施している。4 年生から 6 年生は国語、社会、芸術、音楽が日本語で実施され、理科、数学、体育、コンピューターが英語で実施されている。生徒は英語の

授業（主として reading, writing）を数時間受けている。従って、小学校課程の数学、理科、体育、コンピューターのほとんどすべての授業は英語で行われていると言ってよい。4 年生から 6 年生の段階では、可能なら社会の単元と英語の授業を関連付ける試みも実施している。すなわち、日本の県の歴史に関する学習の場合にはもちろん授業は日本語で行われるが、国際関係に関わる単元の場合、英語で実施を試みている。（例：4 年次— 東南アジアの地理、5 年次— 国際貿易、6 年次— 中国、オーストラリアの学習）

生徒はどうやって日本語の専門用語を学習するか

全ての生徒は、数学、理科、技術科目について、日本語による教科課程で取り上げられる用語を知らねばならないと考えている。単元の内容が英語により導入され教えられた後、日本人教師は英語で教えられた専門用語に対応する日本語を生徒に教えることが多い。これは生徒が日本語で学習到達度テストを受けなければならないために必要となる。専門用語は通常国語の授業の一部を割いて実施している。

「ダブルコース」の学校

学校内の同じ建物の中に、二つのプログラムが存在する。普通コースとイマージョン・コースである。イマージョン・コースに入学する際、特別の英語の試験は行わない。英語の知識がほとんどないか、あるいは全くない生徒でも、イマージョン・コースに参加できるものとわれわれは考えている。入学が許可された場合、保護者の考えでどちらのコースが生徒にとって相応しいかを決定する。多くの学校行事は一緒に実施している。両コースの生徒は通常一緒に遊びかつ学習する機会を多く共有している。双方のプログラムの相違点を最小限にし、かつコースの如何を問わず、全ての生徒は加藤学園の生徒であるという点を強調するように努めている。

カリキュラム

文部省学習指導要領を遵守し、普通コースのカリキュラムとの同一性を保っている。教材の提示方法には相違点があるかも知れないが、カリキュラムの目標は同じである。両コースの相違点の一つは、1 年、2 年次においてテーマ別単元を重視する点である（実例については、保護者用案内を参照されたい）。生徒は同じ教科書を使用する。3 年から 6 年次まで、算数、理科の教科書は英訳し、生徒は学校ではこの翻訳された教科書を使用している。生徒は普通コースの生徒と同一のテストを受ける。

加藤学園イマージョン・プログラムの他の特色

- ・内容により日本語では再授業しないものもある。
- ・教師は生徒に対し英語でのみ接する。
- ・イマージョン授業教室と国語授業教室をはっきりと分離する。使用言語領域を限定し、生徒は英語使用教室と日本語使用教室とを行き来する。
- ・イマージョン教室内とイマージョン関係教師に対しては英語を使用しなければならない。

プログラムの目的

1. 英語を母語とする同年齢の子供と英語を使用して意思疎通が可能であり、英語を使用言語とする学習環境で生活できること。
2. 通常の日本語能力の成長を維持すること。
3. 当該学年次の教科内容を習得すること。
4. 日本人としてのアイデンティティを維持しつつ、外国語と外国文化を理解し尊重することを学ぶこと。

イマージョン・プログラムでどのようにして授業が組織され計画されるか

実例については保護者用案内参照

中学校、高等学校プログラム

イマージョン・プログラムは、中学校、高等学校へと延長拡大されてゆく。基本コースは、中学1年生を1年間、再度イマージョン体験をさせることから始め、生徒の日本の大学受験準備にあわせて徐々に日本語使用授業を増やすように、英語使用を「削減」してゆく。中学校課程は暁秀中学校カリキュラムに沿って実施されるが、『中等教育プログラム』と連繫させる。このプログラムは6年生から高等学校1年を対象とした国際的に認定されたカリキュラムである。海外の大学へと進学を希望する生徒には、国際バカロレアコースを高等学校段階で設置する。

加藤学園が最初のイマージョン・プログラム採用小学校になった経緯

このプログラムは、21世紀の可能性へ向けて有為な生徒を育成するための斬新な教育を実施しようという加藤正秀博士の卓見と希求から生まれた。加藤学園初等部にイマージョンを成功裡に導入できたのはこの学園の教育理念がイマージョン・プログラムの成功に必要とするそれときわめて近いものであるからである。即ち、1)比較的に小人数の学級(20から25名) 2)生徒中心の、活動作業を旨とするプログラムである。

成果(5年生終了時)

算数の成績—全国および県内テスト結果

普通コース、イマージョンコースのどちらも全国平均値、県平均値を大きく上回った。県内テスト、全国テストの算数得点を統計的に見た場合、普通コースとイマージョンコースの生徒間に相違点は見られない。

国語能力—全国および県内テスト結果

普通コースイマージョンコースともに全国平均、県平均を大きく上回っている。県内テスト、全国テストの国語得点を統計的に見た場合、普通コースとイマージョンコースの生徒間に相違点は見られない。

英語成績

6年生のSTEP英検結果:33名中31名が受験。全員が3級を合格。17名が準2級合格(1次)、3名が2級合格(1次)。ITBS値によれば、語彙習得、読解能力は、アメリカ合衆国の英語を母語とする生徒の、ほぼ3年生に相当するという結果である。

課題および可能性

日本でイマージョン・プログラムを運営していく上で数多くの問題がある。そのうちのいくつかは次のようなものである

- 1) 研修及び実体験を経た小学校教員であり、日本に来て働く意欲があり、日本の学校で働くことに順応できる人材を見つけること。
- 2) 英語と日本語とは言語的に類似点が少ない。例えば北米のフランス語やスペイン語イマージョン・プログラムでは二つの言語が同族に属し、文字体系も同様であるが、この場合と比較して、日本の生徒の英語学習は遥かに多くの困難を伴う。
- 3) 日本のハイレベルで早い進度のカリキュラムに沿って教育すること。外国人教員は日本のカリキュラム、日本人教員が当然と思う行事、責任について不案内である。

しかし、この国内初のイマージョン・プログラムを実践してゆく上で、われわれが直面した最も解決困難な問題は、多くの人が共通して持つ、イマージョンやバイリンガルに関する誤った理解であろう。

典型的な二つの誤った理解:

1. 「子供の言語学習能力は限られているのに、さらに別の言語(例:英語)を加えれば、この第二言語を取り入れる結果、第一言語(例:日本語)の発達は阻害される。」
2. 「第二言語、つまり外国語(例:英語)で学習すれば、第一言語(例:日本語)で到達できる学習効果と同じ程度まで到達することはできない。」

この2つの間違った理解の意図することは、子供にとって、第二言語を学習する前に第一言語を十分確立することが重要であるというものであろう。第二言語の習得に時間をかけすぎれば、第一言語の十分な発達が阻害されるだけでなく、認知能力の発達、学力の発達にも悪い影響を与えたとおもわれている。それは子供が第一言語を用いて思考する能力を十分に発達させていないからだというのである。

言語の習得は、バイリンガルに関するこの間違った理解の持つ単純な「論理性」を超え遥かに複雑ものであることは言うまでもない。確かに言えることは、バイリンガル、認知能力、言語発達をめぐる相互関連性は単純な理解の仕方では到底及ばないほどの複雑性を持っているということである。

われわれのプログラムの生徒達の成績を見れば、日本の外国語教育に関する前掲のよくある理解の仕方は間違いであることは明白である。全ての学年で、生徒達は外国語を習得しながら通常の言語能力と学力発達を維持し続けている。

二ヶ国語習得に対するこのような考えは偏見的であり、日本の外国語習得やグローバル化への努力の将来的展望に大きなマイナスである。このシンポジウムに参加された皆さんのご尽力で、「付加的」バイリンガル育成に関わる理解が深まってくれることを願っている。生徒の英語による伝達技能の改善を望み、創造的で柔軟性に富む思考力の育成を図り、外国の異なった文化、国民に対するより多くの寛容性を育てることを日本の学校が目指すなら、イマージョン・プログラムが確かな選択であることを、われわれの経験が教えてくれている。

またイマージョンは二ヶ国語習得を推進し、日本の子供たちの「国際理解」を深める為の一つの手段にすぎない。今日と明日の報告では沢山の方法が提案されるであろうが、しかし、その全てに共通する点は、みな日本の一層の外国語習得とグローバル化を目指した活動を担っているという点である。